OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	平成二十八年度　退職教員略歴・主要業績
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2017, 57, p. 151-178
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61362
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

平成二十八年度
退職教員略歴・主要業績

出原（いずはら）　隆俊（たかとし）	教授	国文学・東洋文学講座 （日本文学）
上野（うえの）　修（おさむ）	教授	哲学講座 （哲学哲学史）
内田（うちだ）　次信（つぐのぶ）	教授	芸術学講座（文芸学）
藤田（ふじた）　治彦（はるひこ）	教授	芸術学講座（美学）
三宅（みやけ）　祥雄（よしお）	准教授	アート・メディア論講座 （アート・メディア論）

出原隆俊教授　略歴・主要業績

■略歴

1981年４月　　広島女子大学文学部講師
1984年４月　　広島女子大学文学部助教授
1986年４月　　京都教育大学教育学部助教授
1989年４月　　大阪大学文学部助教授
1999年11月　　大阪大学大学院文学研究科教授

■業績一覧

【著書】

（単著）『異説　日本近代文学』、大阪大学出版会　2010/1
『二百十日・野分』、岩波書店　2016/11
（共著）『漱石全集』第三巻、岩波書店　1994/2
『定本　漱石全集』第三巻、岩波書店　2017/2
『新日本古典文学大系　明治篇　キリスト者文学集』岩波書店　2002/12
『鷗外近代小説集』第五巻　岩波書店　2013/1

【論文】

1. 「蓬莱曲」考―「塵の形骸」の「義の児」―／国語国文、1979/12
2. 透谷におけるドイツ文学評論の受容について―人生相渉論争への一視界―／国語国文、1981/5
3. 「他界」と「崇高」―人生相渉論争開幕前夜の検討―／国語国文、1982/8
4. 人生相渉論争開幕の周辺/日本近代文学、1982/10
5. 透谷における「ハムレット」受容の意味について―人生相渉論争の底流―／国語国文、1983/6
6. 洋行と“からゆき”―反「舞姫」小説の位相―／文学、1985/3
7. 〈無気味〉の系譜―明治二十年代前期文学の一端―／文学、1985/11
8. 蓮華寺の鐘―『破滅』読解の試み／国語国文、1987/1
9. 『破戒』・「蒲団」の周辺―教師・腰弁・空想・自意識／京都教育大学国文学会誌、1987/6

10. お力の登場―「にごりえ」における〈借用〉について／文学、1988/7
11. 近代文学と「東京」 鷗外の場合／日本近代文学、1989/5
12. 鷗外とその時代・都市（都市問題・市区改正）／別冊国文学、1989/10
13. 「源叔父」の方法／語文（大阪大学）、1990/11
14. 「たけくらべ」の成立基盤／国語国文、1991/12
15. 「舞姫」私読―「罪と罰」と比較しつつ／待兼山論叢（文学篇）、1991/12
16. 〈ユートピア〉の諸相／日本文学史を読む、1992/6
17. 「にごりえ」の〈彼の人〉／文学、1994/4
18. 透谷とドイツ哲学・文学評論／透谷と近代日本、1994/5
19. 森鷗外『青年』―時代思潮の中の小泉純一／国文学、1994/6
20. 《樋口一葉》の小説作法（さくほう）／国文学、1994/10
21. 「闇夜」の背後／日本近代文学、1995/5
22. 『十三夜』を統合するもの―《擦れ》の機能／解釈と鑑賞、1995/6
23. 甦える古語―ウツシヨの行方／国文学、1996/9
24. 《典拠》と《借用》―水揚げ・出奔・《孤児》物語／論集樋口一葉、1996/11
25. 「貧民倶楽部」の周辺／叙説、1997/3
26. 鴎外が多用する表現について―「山椒大夫」を中心に―／講座・森鴎外２、1997/5
27. 〈下層〉という光景―荷風「あめりか物語」、「ふらんす物語」の一面／異文化との遭遇、1997/9
28. 小六という〈他者〉―御米と火鉢／漱石研究、1997/11
29. 鷗外と漱石／国文学、1998/1
30. 「半日」／国文学、1998/1
31. 鷗外作品における〈狂気〉／語文（大阪大学）、1998/10
32. 「誰も知らぬ」試論―太宰の鷗外受容の一端／太宰治研究、1999/6
33. 『優しいサヨクのための嬉遊曲』―八〇年代の「遅れてきた青年」の戦略／国文学、1999/7
34. 「高瀬舟」異説／森鷗外研究８、1999/9
35. 〈心〉と〈外部〉―漱石作品の一端／〈心〉と〈外部〉―表現・伝承・信仰と明恵「夢記」―、2002/3
36. 「春」の背景―『透谷全集』と小栗風葉『青春』―／島崎藤村研究、2002/9
37. 透谷と鑑三・透谷と愛山の一側面／キリスト者文学集、2002/12
38. 『都の花』と『なにはがた』―〈関西文人〉の位置／阪大近代文学研究、2003/3

39.「明暗」論の出発／国語国文、2003/3
40. 三島作品における〈内部〉と〈外部〉―「金閣寺」を中心に／語文（大阪大学）、2004/2
41. 作家の妻という問題―〈森しげ〉の作品を中心に／女性作家《現在》、2004/3
42.〈内部〉と〈外部〉という問題―日本近代文学の一面／国語と国文学、2004/4
43. 泉鏡花作品における〈内〉と〈外〉―〈魔〉を中心に／文学、2004/7
44. 一葉小説における〈仕草〉―「わかれ道」を中軸に／国語国文、2005/11
45. 透谷用語の在りか―「罪と罰」批評について／北村透谷―《批評》の誕生、2006/3
46. 透谷における〈内部〉と〈外部〉／北村透谷研究、2007/6
47. Kの代理としての私―「心」における言葉の〈連鎖〉について／国語国文、2007 /10
48. 裏側から読む「心」／語文（大阪大学）、2007/12
49. 芥川龍之介「疑惑」と鷗外・志賀直哉／テクストの生成と変容、2008/3
50.「金閣寺」の構成意識／三島由紀夫研究、2009/2
51. 郊外と貧民窟／芸術とコミュニケーションに関する実践的研究、2009/3
52. 芸術は社会を動かせるのか？／文学・芸術は何のためにあるのか、2009/3
53. 欧州へ―「舞姫」から「新生」まで／旅立ちのかたち、2009/11
54. 横光の鷗外翻訳作品等の利用について／大阪大学近代文学研究会『阪大近代文学研究』9、2011/3
55.「愛と美について」と高木貞治述『過度期ノ数学』『太宰治研究』19、2011/6
56. 芥川の鷗外受容の一面―『偸盗』・『孤独地獄』と『黄金杯』・『百物語』―、福岡女子大学国文学会『香椎潟』（福岡女子大学国文学会）、56、2012/3
57.〈傍観者〉の系譜／語文（大阪大学）、2012/6
58.『鼠坂』の周辺／岩波書店、『文学』隔月刊14巻1号、2013/1
59. それでも〈日記〉を記すこと―『舞姫』の手記の実態について―、勉誠出版、『森鷗外『舞姫』を読む』、2013/4
60.「郭内の帰り」は朝帰りか？／大阪大学近代文学研究会『阪大近代文学研究』9、2015/3
61.「猿ヶ島」小考―「俊寛」に触れて―／太宰治研究24、2016/6

【学会発表】

1.「鷗外の場合」（日本近代文学会　秋季大会　特集〈近代文学と「東京」〉1988.10.23）
2.「名称と実態」（日本近代文学会　秋季大会　特集〈小説ジャンルの再編成―日清戦争以後〉1993.10.24）

3. 「「椋鳥通信」で言及した作者の鷗外翻訳作品の他者利用について」（国際シンポジウム「文学における国際交流―異文化理解の検証と普及―」、2010.10.21）

【書評】

1. 関礼子著『姉の力　樋口一葉』／国文学、1994/4
2. 尾西康充著『北村透谷論―近代ナショナリズムの潮流の中で』／日本文学、1998/9
3. 北川秋雄著『一葉という現象―明治と樋口一葉』／日本近代文学、1999/10
4. 山田俊治・十重田裕一・笹原宏之編著『山田美妙『竪琴草紙』本文の研究』／国文学、2001/1
5. 山田有策著『深層の近代　鏡花と一葉』／泉鏡花研究会会報、2001/12
6. 佐々木雅発著『独歩と漱石　汎神論の地平』／日本近代文学、2006/11

【学会時評】

春季大会印象記／日本近代文学会会報、1986/9

平成九年（自１月至12月）　国語国文学界の展望(2)　近代　森鷗外／文学・語学、1998/10

秋季大会印象記／日本近代文学会会報、2010/3

上野　修教授　略歴・研究業績

■履歴（略歴）

学歴

1971（昭和46）年 3 月	京都教育大学附属高等学校卒業
1971（昭和46）年 4 月	国際基督教大学教養学部入学
1976（昭和51）年 3 月	同上人文科学科哲学卒業（教養学士）
1976（昭和51）年 4 月	大阪大学大学院文学研究科前期課程入学（哲学哲学史）
1979（昭和54）年 3 月	同上修了（文学修士）
1979（昭和54）年 4 月	大阪大学大学院文学研究科後期課程進学（哲学哲学史）
1984（昭和59）年 3 月	同上単位修得退学
1985（昭和60）年11月	パリ第一大学（Panthéon-Sorbonne）哲学科博士課程入学（フランス政府給費留学）
1986（昭和61）年 3 月	同上中退

職歴

1986（昭和61）年 4 月	大阪大学文学部助手（1990年 9 月まで）
1990（平成 2 ）年10月	山口大学教養部助教授（1996年 3 月まで）
1996（平成 8 ）年 4 月	山口大学人文学部助教授（1997年 3 月まで）
1997（平成 9 ）年 4 月	山口大学人文学部教授（2004年 3 月まで）
2004（平成16）年 4 月	大阪大学文学研究科教授（2017年 3 月まで）

受賞

第 3 回大阪大学総長顕彰（研究部門）

■主要業績

著書（単著）

1. 『精神の眼は論証そのもの―デカルト、ホッブズ、スピノザ』、学樹書院、1999年 3 月、246p.
2. 『スピノザの世界―神あるいは自然』、講談社、2005年 4 月、193p.
3. 『スピノザ―「無神論者」は宗教を肯定できるか』、日本放送出版協会、2006年 7 月、107p.

4. 『デカルト、ホッブズ、スピノザ―哲学する十七世紀』、講談社、2011年10月、263p.（1の学術文庫化）
5. 『哲学者たちのワンダーランド―様相の十七世紀』、講談社、2013年11月、276p.
6. 『スピノザ『神学政治論』を読む』、筑摩書房、2014年6月、309p.

著書（共著）

1. *Spinoza: puissance et ontologie*, sous la direction de Myriam Revault d'Allonnes et de Hadi Rizk, Éditions Kimé, Paris, 1994, 216p.（II-1. *Mentis oculi ipsae demonstrationes:* jouissance et démonstration dans *l'Ethique* de Spinoza）
2. 『西洋哲学史〔近代編〕』、宗像恵・中岡成文編著、ミネルヴァ書房、1995年4月、308p.（Ⅱ-3　スピノザ、あるいは肯定する自然）
3. 『スピノザと政治的なもの』、工藤喜作・桜井直文編、平凡社、1995年5月、379p.（Ⅱ-2 二つの「あたかも」―スピノザ『政治論』のために）
4. 『哲学者たちは授業中』、入江幸男・入不二基義・松葉祥一・大島保彦・上野修、ナカニシヤ出版、1997年5月、225p.（第五講義　正義とヒステリー―アンティゴネー問題のために）
5. *Spinoza by 2000, The Jerusalem Conferences, Volume III, Desire and Affect: Spinoza as Psychologist, Papers Presented at The Third Jerusalem Conference (Ethica III)*, Yirmiyahu Yovel (ed.), Little Room Press, 1999, 294p.（I-5. *Res Nobis Similis*: Desire and the Double in Spinoza）
6. 『真理の探究―17世紀合理主義の射程』、村上勝三編、知泉書館、2005年6月、353p.（第3部第2章　スピノザと真理）
7. 『現代倫理学事典』、大庭健・井上達夫・川本隆史・加藤尚武・神崎繁・塩野谷祐一・成田和信編、弘文堂、2006年12月、1100p.（「スピノザ」の項）
8. 『ドゥルーズ／ガタリの現在』、小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編、平凡社、2008年1月、724p.（意味と出来事と永遠と―ドゥルーズ『意味の論理学』から）
9. 『〈私〉の哲学を哲学する』、上野修・永井均・入不二基義・青山拓央、講談社、2010年10月、378p.（第Ⅱ部　上野修セクション、第Ⅳ部-3　存在の耐えられない軽さ―ラカン、デイヴィドソン、永井均）
10. 『西洋哲学史Ⅲ　「ポスト・モダン」のまえに』、神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編、講談社、2012年6月、400p.（4　ホッブズとスピノザ―われわれは自分の外にいる）
11. 『ライプニッツ読本』、酒井潔・佐々木能章・長綱啓典編、法政大学出版局、2012年10月、

404p.（スピノザとライプニッツ―世界の不透明性について）

12.『哲学の挑戦』、西日本哲学会編、春風社、2012年11月、472p.（真理と直観―永遠の相のもとに）

13.『ライプニッツ著作集　第Ⅱ期　第１巻 哲学書簡』、酒井潔・佐々木能章編、工作舎、2015年５月、447p.（翻訳：「シュラー氏の書簡からの情報」、ライプニッツ＝注解）

論文（すべて単著）

1. 身体の観念あるいは精神―スピノザにおける精神とその認識の起源的定位、『カルテシアーナ』、No. 3、pp. 1-32、1981年３月.
2. デカルトにおける物体の概念、『待兼山論叢』、No. 15、pp. 1-16、1982年１月.
3. スピノザ『国家論』における《Imperium（統治権ないし国家）》、『関西哲学会紀要』、No.17、pp. 35-40、1983年２月.
4. 「残りの者」―あるいはホッブズ契約説のパラドックスとスピノザ、『カルテシアーナ』、No. 8、pp. 27-62、1988年３月.
5. 「われらに似たるもの」―スピノザにおける想像的自我およびその分身と欲望、『カルテシアーナ』、No. 9、pp. 27-49、1989年３月.
6. スピノザの今日、声の彼方へ、『現代思想』、Vol. 17-4、pp. 37-42、1989年４月.
7. 無数に異なる同じもの―スピノザの実体論、『カルテシアーナ』、No. 10、pp. 31-56、1990年３月.
8. 絶対制のシミュラークル―ホッブズとスピノザの国家論、『現代思想』、Vol. 18-5、pp. 74-82、1990年５月.
9. 意志・徴そして事後―ホッブズの意志論、『カルテシアーナ』、No. 11、pp. 11-27、1991年３月.
10. Spinoza et le paradoxe du contrat social de Hobbes: <le reste>, *Cahiers Spinoza*, No. 6, pp. 269-296, 1991年４月.
11. 取消し不可能なもの、あるいはホッブズの意志論、『西日本哲学会々報』、No. 40、pp. 1-4、1992年10月.
12. For Spinoza's *Tractatus Politicus*、『山口大学哲学研究』、Vol. 1、pp. 94-101、1992年12月.
13. 「精神の眼は論証そのもの」―スピノザ『エチカ』における享楽と論証、『山口大学哲学研究』、Vol. 2、pp. 81-95、1994年９月.
14. スピノザ『神学政治論』の孤独、『スピノザ協会会報』、1995年５月.

15. スピノザと敬虔の文法―『神学政治論』の「普遍的信仰の教義」をめぐって、『山口大学哲学研究』、Vol. 4、pp. 45-64、1995年 9 月.
16. スピノザの聖書解釈―神学と哲学の分離と一致、『現代思想』、Vol. 24-14、pp. 122-131、1996年11月.
17. Spinoza's Biblical Interpretation―Theology and Philosophy, Their Separation and Coincidence、『山口大学哲学研究』、Vol. 6、pp. 35-51、1997年 9 月.
18. スピノザの預言論―『神学政治論』読解に向けて、『批評空間』、Ⅱ-18、1998年 7 月.
19. スピノザの共有信念論―『神学政治論』における「きわめて平凡でありふれたもの」について、『山口大学哲学研究』、Vol. 7、pp. 61-80、1998年11月.
20. アルチュセールとスピノザ、『現代思想』、Vol. 26-15、pp. 213-221、1998年12月.
21. スピノザ『神学政治論』における社会契約と敬虔、『山口大学文学会志』、No. 49、pp. 159-172、1999年 2 月.
22. 言語習得における原抑圧と真理―デイヴィドソン、ラカン、『山口大学哲学研究』、No. 8、pp. 1-20、1999年10月.
23. スピノザの奇蹟迷信論、『スピノザーナ』、No. 2、pp. 3-15、2000年12月.
24. On the 'Credo Minimum' in Spinoza's *Tractatus Theologico-Politicus*、『山口大学哲学研究』、Vol. 10、pp. 47-74、2001年10月.
25. 意志と意図、あるいは責務の時間、『山口大学文学会志』、No. 53、pp. 89-97、2003年 2 月.
26. スピノザと真理の規範、『フランス哲学・思想研究』、No. 8、pp. 81-93、2003年 9 月.
27. コギトの確実性―様相の観点から―、『メタフュシカ』、No. 35、pp. 1-12、2004年12月.
28. 必然、永遠、そして現実性―スピノザの必然主義、『スピノザーナ』、No. 6、pp. 5-21、2005年 3 月.
29. The Certainty of the Cogito: A Modal Perspective, *Philosophia OSAKA*, No. 1, pp. 1-12、2006年 3 月.
30. 現実性と必然性―スピノザを様相的観点から読み直す、『哲学』、No. 57、pp. 77-92、2006年 4 月.
31. Spinoza on Prophetic Certainty, *Philosophia Osaka*, No. 2, pp. 63-83, 2007年 3 月.
32. スピノザと群集の声、『現代思想』、Vol. 36-1、pp. 175-185、2008年 1 月.
33. Actuality and Necessity; Rereading Spinoza from a Modal Perspective, *Philosophia OSAKA*, No. 3, pp. 25-36, 2008年 3 月.
34. 出来事の時間―ドゥルーズ的コンセプト―、『時間学研究』、Vol. 2、pp. 37-44、2008年

3月.
35. ホイエルをめぐる三人の人物とスピノザ、『スピノザーナ』、No. 9、pp. 76–82、2008年9月.
36. The Social Contract in Spinoza's *Tractatus Theologico-Politicus, Philosophia OSAKA*, No. 4, pp. 55–67, 2009年3月.
37. ライプニッツとスピノザ—現実性をめぐって—、『哲学の探究』、No. 36、pp. 5–21、2009年5月.
38. ネグリのスピノザ解釈、『情況』、Vol. 3、No. 86、pp. 164–170、2009年7月.
39. スピノザの群集概念にみる転覆性について、『思想』、No. 1024、pp. 102–116、2009年8月.
40. Spinoza on Miracles and Superstition, *Philosophia OSAKA*, No. 5, pp. 67–78, 2010年3月.
41. 決定論の彼方、自由としての必然—スピノザの場合（後日考を付す）、『西日本哲学会年報』、No. 19、pp. 145–160、2011年10月.
42. スピノザ『エチカ』の〈定義〉、『アルケー』、No. 20、pp. 42–53、2012年7月.
43. デカルトは矛盾しているか？—心身の実体的区別と合一—、『待兼山論叢』、No. 46、pp. 1–18、2012年12月.
44. 真理・意味・主体—デイヴィドソンの根元的解釈とラカン、『ジャック・ラカン研究』、No. 9/10、pp. 214–235、2012年12月.
45. まなざしなき無限、記憶なき永遠—スピノザの奇妙な形而上学、『哲学』、No. 65、pp. 56–72、2014年4月.
46. 虚軸としてのスピノザ、あるいは石像の宴、『思想』、No. 1080、pp. 80–94、2014年4月.
47. Ordinary and Usual Things, or Common Belief in Spinoza's *Tractatus Theologico-Politicus, Philosophia OSAKA*, No. 10, pp. 27–37, 2015年3月.
48. アンリとスピノザ、その近さと遠さ、『ミシェル・アンリ研究』、No. 5、pp. 1–13、2015年5月.
49. Are the Real Distinction and the Substantial Union of Mind and Body in Descartes in Contradiction?, *Philosophia OSAKA*, No. 11, pp. 55–62, 2016年3月.
50. スピノザの存在論的実在論、『メタフュシカ』、No. 47、pp. 1–10、2016年12月.

内田次信教授　略歴・研究業績一覧

■履歴

Ⅰ　略歴

昭和27年３月	愛知県に生まれる
昭和49年３月	京都大学文学部西洋古典語学･西洋古典文学専攻卒業
昭和51年３月	京都大学大学院文学研究科修士課程西洋古典語学･西洋古典文学専攻修了
昭和54年３月	京都大学大学院文学研究科博士課程西洋古典語学・西洋文学専攻単位修得中退
昭和54年４月	関西大学文学部非常勤講師（平成３年３月まで）
昭和54年４月	京都女子大学文学部非常勤講師（昭和57年３月まで）
昭和55年４月	光華女子短期大学家政学部非常勤講師（昭和56年３月まで）
昭和56年４月	光華女子大学文学部専任講師（昭和61年３月まで）
昭和61年４月	光華女子大学文学部助教授（平成６年３月まで）
平成３年４月	独マインツ大学古典研究室へ客員教授として派遣される（平成４年３月まで）
平成６年４月	光華女子大学文学部教授（平成14年３月まで）
平成14年４月	大阪学院大学国際学部教授（平成18年３月まで）
平成15年11月	博士号（文学）取得、京都大学
平成18年４月	大阪大学大学院文学研究科助教授（平成19年３月まで）
平成19年４月	大阪大学大学院文学研究科教授
平成29年３月	大阪大学大学院定年退職

Ⅱ　学会関係

昭和56年４月より	日本西洋古典学会会員（平成22年４月より同委員）
平成15年４月より	地中海学会会員
平成19年11月より	美学会会員

■業績一覧

Ⅰ　著書

1. 平成３年５月『ギリシア文学を学ぶ人のために』（共著）。世界思想社（編者：松本仁助、

岡道男、中務哲郎）。

2. 平成15年11月『呼びかけるドラマ　アリストパネスとギリシア劇』（単著）。博士学位論文、京都大学文学部。
3. 平成24年３月「古代のホメロス批評とヘラクレイトス『ホメロスのアレゴリー』」（共著）。『近代精神と古典解釈』所収（研究代表者：手島勲矢）、国際高等研究所。
4. 平成26年３月『ヘラクレスは繰り返し現われる―夢と不安のギリシア神話』（単著）。大阪大学出版会。

Ⅱ　論文

1. 昭和54年８月「アリストパネスとメナンドロス」（単著）。『古代文化』31号（古代学協会）、p. 18–39。
2. 昭和56年３月「ピンダロスと彼の頌歌」（単著）。『西洋古典学研究』XXIX号（岩波書店）、p. 14–28。
3. 昭和56年12月「文学は何のためにあるか―古代ギリシア・ロ―マ人の考えから―」（単著）。『光華女子大学研究紀要』第19集、p. 68–75。
4. 昭和57年12月「ソポクレス『ピロクテテス』における「船出」の場面とその象徴的意味について」（単著）。『光華女子大学研究紀要』第20集、p. 49–64。
5. 昭和58年12月「ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΗ Σ ΠΕΡΙ ΤΟΥ ΜΥΘΟΥ ΚΑΙ ΤΟΥ ΗΘΟΥΣ」（単著）。『光華女子大学研究紀要』第21集、p. 55-62。
6. 昭和61年３月「Die Gestalt des Dichters in Pindars Erster Olympischer Ode」（単著）。『Antike und Abendland』（Walter de Gruyter）32号、p. 1–19。
7. 昭和62年８月「ヘシオドス, カリマコス　とウエルギリウス―創作理念の系譜―」（単著）。『西洋古典論集』（京都大学西洋古典研究会）、p. 23–41。
8. 昭和62年12月「アリストパネス『平和』のパラバシスについて/Zur Parabase von Aristophanes' 'Frieden'」（単著）。『光華女子大学研究紀要』第25集、p. 81–94。
9. 昭和63年３月「エウリピデス『ヘラクレス』とセネカ『狂えるヘルクレス』とにおけるハデス行の意義」（単著）。『ギリシア・ラテン文学研究会第３回シンポジウム記録』（ギリシア・ラテン文学研究会刊）、p. 23–32。
10. 昭和63年12月「On the Myth of Pindar's Olympian one」（単著）。『光華女子大学研究紀要』第26集、p. 25–42。
11. 平成２年12月「アリストパネス『アカルナイの人々』における喜劇の力と悲劇」（単著）。『西洋古典論集』（京都大学西洋古典研究会）、p. 1–42。

12. 平成４年12月「ピンダロス『ピュティア第十一歌』」（単著）。『光華女子大学研究紀要』No. 30、p. 33-58。
13. 平成４年12月「Aristophanes als Freund der Muse. Zur Parabase des 'Friedens'」（単著）。Rheinisches Museum für Philologie（J.D.Sauerländer's Verlag）135号、p. 225-234。
14. 平成６年３月「オデュッセウスとその妻」（単著）。『西洋古典論集』（京都大学西洋古典研究会）、p. 62-80。
15. 平成７年12月「ΔΕΞΙΟΤΗΣ ΚΑΙ ΝΟΥΘΕΣΙΑ―アリストパネス『蛙』について（Ⅰ）―」（単著）。『光華女子大学研究紀要』No. 33、p. 97-112。
16. 平成８年12月「ΔΕΞΙΟΤΗΣ ΚΑΙ ΝΟΥΘΕΣΙΑ―アリストパネス『蛙』について（Ⅱ, Ⅲ）―」（単著）。『光華女子大学研究紀要』No. 34、p. 73-113。
17. 平成10年12月「『蛙』とエウリピデス『バッカイ』とにおけるディオニュソス」（単著）。『光華女子大学研究紀要』No. 36、p. 117-147。
18. 平成12年12月「呼びかけるドラマ―アリストパネスとギリシア劇―（序）」（単著）。『光華女子大学研究紀要』No. 38、p. 183-228。
19. 平成16年６月「ルキアノス『ゼウス論破さる』とストア的宿命論への諷刺における混ぜ合わせ技法」。『大阪学院大学国際学論集』第15第１号、p. 21-35。
20. 平成17年12月「ルキアノス『饗宴またはラピテス族』―乱闘する哲学者たちの戯画」。『大阪学院大学国際学論集』第16第２号、p. 1-11。
21. 平成19年２月「エウリピデス『メデイア』における地と天上―新たな狂気の創造―」。『待兼山論叢』第40号美学篇、p. 1-26。
22. 平成19年３月「ルキアノス『ニグリノス』とローマ諷刺」。『大阪大学大学院文学研究科紀要』第47巻、p. 1-8。
23. 平成20年３月「Beyond Mimesis」, Words For Design I, 『平成19年度-21年度科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）「比較デザイン論研究　意匠・構想・設計・創造論の歴史的展望」』研究代表者：藤田治彦、平成19年度研究年報、p. 16-27。
24. 平成20年３月「エウリピデス『オレステス』とその間テキスト性」。『大阪大学大学院文学研究科紀要』第48巻、p. 81-95。
25. 平成20年３月「宗教と哲学の妄想を笑う―ルキアノスの諷刺文学とファンタジー（その一）」。『文芸学研究』第12号、p. 1-29。
26. 平成22年３月「トロイア攻略者オデュッセウスの慟哭と希望」。『西洋古典論集』XXII、p. 38-124。
27. 平成22年３月「ディオン・クリュソストモス『トロイア陥落せず』―弁論術から歴史フィ

クションへ」。『文芸学研究』第14号、p. 61–115。

28. 平成23年３月「ノストイ（帰還）の文学としてのピロストラトス『ヘーローイコス』」。『西洋古典学研究』LIX、p. 107–117。
29. 平成24年３月「『オデュッセイア』の読まれ方」。『大阪大学大学院文学研究科紀要』第52巻、p. 151–174。
30. 平成24年３月「ヘラクレスの死」。『2011年度大阪大学大学院文学研究科共同研究　成果報告書』研究代表者：加藤浩、大阪大学大学院文学研究科、p. 1–7。
31. 平成25年３月「ルキアノス第五篇」。『2012年度大阪大学大学院文学研究科共同研究「ギリシア・ローマ神話のアレゴリー―その表現・解釈・理論に関する研究―」成果報告書』研究代表者：内田次信、大阪大学大学院文学研究科、p. 1–20。
32. 平成26年３月「古典的な地下行神話とH.G.ウェルズ『月世界最初の人間』」。『2013年度大阪大学大学院文学研究科共同研究「ヨーロッパ芸術におけるギリシア・ローマ神話の水脈に関する分野横断的研究」成果報告書』研究代表者：内田次信、大阪大学大学院文学研究科、p. 1–8。

Ⅲ　事典類

1. 平成25年12月「岩波書店辞典編集部編『岩波　世界人名大事典』」（ギリシア神話関連分担執筆）、岩波書店。

Ⅳ　翻訳

1. 平成３年７月「エウリーピデース『ヘーラクレース』」（ギリシア悲劇全集）６巻所収、岩波書店。
2. 平成５年７月「バッハオーフェン『母権論』」第２巻、（共訳）。p. 359–395, 515–558（監訳：岡道男、河上倫逸）。みすず書房。
3. 平成11年10月『ルキアノス選集』国文社。
4. 平成13年９月「ピンダロス『祝勝歌集／断片選』」京都大学学術出版会。
5. 平成20年10月「ピロストラトス『英雄が語るトロイア戦争』」平凡社。
6. 平成21年２月「アリストパネース『蛙』」（ギリシア喜劇全集３）、岩波書店。
7. 平成22年８月『ギリシア喜劇全集７』（群小詩人断片Ⅰ）、岩波書店。
8. 平成24年２月「ディオン・クリュソストモス『トロイア陥落せず』」京都大学学術出版会。
9. 平成25年２月「ルキアノス『偽預言者アレクサンドロス―全集４』」京都大学学術出版会。
10. 平成25年10月「プルタルコス他『古代ホメロス論集』」京都大学学術出版会。

11. 平成27年 8 月「ディオン・クリュソストモス『王政論』」京都大学学術出版会。

Ⅴ　口頭発表

1. 昭和55年 5 月「ピンダロスにおける祈りについて」日本西洋古典学会第31回大会。於金沢大学。
2. 昭和62年10月「エウリピデス『ヘラクレス』とセネカ『狂えるヘルクレス』とにおけるハデス行の意義」第 3 回ギリシア・ラテン文学研究会。於京都産業大学。
3. 平成 5 年 6 月「『オデュッセイア』における女性たち」日本西洋古典学会第44回大会。於学習院大学。
4. 平成17年12月「ルキアノス『饗宴またはラピテス族』について」西洋古典研究会。京大文学部。
5. 平成19年 3 月「エウリピデス『オレステス』における間テキスト性」同志社大学。
6. 平成19年 9 月「Beyond Mimesis, Workshop: Dalla peripheria al centro」Universita di Bologna.
7. 平成20年 1 月「『ケルトのヘラクレスの異様と偉容』―ルキアノスと言語の力」大阪大学待兼山会館。
8. 平成20年 7 月「ルキアノス『ペレグリノスの最期』について」大阪大学待兼山会館。
9. 平成20年 8 月「古代のホメロス批評とヘラクレイトス『ホメロスのアレゴリー』」国際高等研究所プロジェクト「近代精神と古典解釈」国際高等研究所。
10. 平成21年 7 月「ディオン・クリュソストモス『トロイア陥落せず』における神話伝承と「真実」の問題―弁論術からフィクションへ」美学会西部会。於京都大学。
11. 平成22年 6 月「帰還（ノストイ）の文学としてのピロストラトス『ヘーローイコス』」日本西洋古典学会大会。山口大学。
12. 平成24年 2 月「ヘラクレスの死」ギリシア・ローマ神話学研究会。大阪大学待兼山会館。
13. 平成25年 5 月「古典的な冥界神話とH.G.ウェルズ」待兼山芸術学会第23回研究発表会。大阪大学アセンブリー・ホール。

藤田治彦教授　略歴・主要業績

略　歴

昭和26（1951）年10月１日	福島県田村郡小野町に生まれる
昭和39（1964）年３月	福島県小野町立小野新町小学校卒業
昭和42（1967）年３月	福島県小野町立小野中学校卒業
昭和45（1970）年３月	福島県立磐城高等学校卒業
昭和46（1971）年４月	京都工芸繊維大学工芸学部意匠工芸学科入学
昭和50（1975）年３月	京都工芸繊維大学工芸学部意匠工芸学科卒業
昭和50（1975）年４月	京都工芸繊維大学大学院修士課程工芸学研究科入学
昭和52（1977）年３月	京都工芸繊維大学大学院修士課程工芸学研究科修了
昭和52（1977）年４月	大阪市立大学大学院博士後期課程生活科学研究科入学
昭和54（1979）年９月	フルブライト留学生としてアメリカ留学 （ニューヨーク州立大学、イエール大学大学院に学ぶ）
昭和58（1983）年３月	大阪市立大学大学院博士後期課程生活科学研究科修了 （学術博士の学位を取得）
昭和58（1983）年９月	カナダ政府給費トロント大学建築造園学部特別研究員
昭和59（1984）年９月	京都工芸繊維大学工芸学部助手
平成２（1990）年４月	京都工芸繊維大学工芸学部意匠工芸学科助教授
平成９（1997）年９月	ルーヴェン・カトリック大学都市建築保存研究所客員教授
平成10（1998）年４月	大阪大学文学部人文学科助教授
平成11（1999）年４月	大阪大学大学院文学研究科助教授
平成14（2002）年４月	大阪大学大学院文学研究科教授
平成17（2005）年４月	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授 大阪大学大学院文学研究科兼任教授
平成22（2010）年４月	大阪大学大学院文学研究科教授 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター兼任教授 （2008年４月−７月：ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館客員研究員、2008年６月−９月：ボローニャ大学高等研究所客員上級研究員）
平成29（2017）年３月	大阪大学を定年退職

受　賞

平成14（2002）年7月：意匠学会賞

平成15（2003）年5月：大阪大学共通教育賞

学会関係役員

美学会	委　員：1996年～ 1999年；2002年～ 2016年
意匠学会	委　員：1996年～現在に至る
	会　長：2005年～現在に至る
民族藝術学会	理　事：1999年～現在に至る
日本デザイン学会	評議員：1999年～現在に至る

主要業績（年代順）

1981

1. "THE ARCHITECTURE OF JOSEPH LYMAN SILSBEE -Personal Background and Historical Context-"『日本建築学会近畿支部計画系研究報告集』昭和56年度版、1981/5、pp. 581-584.
2. 「ネオ＝グレックとイーストレイク―アメリカにおける解釈と同時代の意匠」『デザイン理論』第20号、1981/11、pp. 57-75.

1982

3. "THE ARCHITECTURE OF JOSEPH LYMAN SILSBEE -Transitional Years, Syracuse to Chicago-"『日本建築学会近畿支部計画系研究報告集』昭和57年度版、1982/5、pp. 621-624.

1983

4. 「非相称の生成―そのデザインにおける意味―」『デザイン理論』第22号、1983/11、pp. 23-37.

1984

5. 「シンメトリーとイレギュラリティー・第1部・イレギュラー・シンメトリーの形成」『日本建築学会論文報告集』第343号、1984/9、pp. 153-161.

1985

6. 「シンメトリーとイレギュラリティー・第2部・イレギュラー・シンメトリーの展開」『日本建築学会論文報告集』第351号、1985/5、pp. 102-110.
7. 「ユニヴァーシティ・カレッジ以前のトロント大学―セント・ジョージ・キャンパスの

形成」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第25号、1985/5、pp. 821-824.

1986

8.「機能主義とピクチャレスク―ホレイショ・グリノウの造形論をめぐって―」京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』、第34号、1986/2、pp. 89-113.
9.「セント・マイケルズ・カレッジの計画と実施―1850年代のカナダにおけるピクチャレスクの一形態」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第26号、1986/6、pp. 769-772.
10.「機械による美術工芸―シカゴ・デザインの生産と消費」『デザイン理論』第25号、1986/11、pp. 2-23.

1987

11.「アリスンの『趣味論』―デザインの位置をめぐって―」『美学』第148号、1987/3、pp. 13-24.
12.「ハチスンのデザイン論」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第27号、1987/5、pp. 921-924.

1988

13.「ピクチャレスク・ランドスケープの構成要素―クロード・ロランの風景画をめぐって―」京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第36号、1987/3、pp. 47-71.
14.「クロード・ロランの風景画の研究―ピクチャレスク・ランドスケープの源流を求めて―」『鹿島美術財団研究年報』第6号、1988、pp. 234-238.
15.「相称・均衡・ピクチャレスク―ダウニングから駒杵勤治まで―」『美術史』第124号、1988/5、pp. 122-137.
16.「ホガースのデザイン論」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第28号、1988/5、pp. 817-820.

1989

17.『風景画の光』講談社、1989/4、pp. 1-204.
18.「デザインの意味」、神林恒道・潮江宏三・島本浣編『芸術学ハンドブック』、東京、勁草書房、1989/4、pp. 232-243.
19.「バークリーのデザイン論―『アルシフロン』を中心に―」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第29号、1989/5、pp. 953-956.

1991

20.『マンハッタンの建築』講談社、1991/11、pp. 1-260.
21.「ポスト・モダン以後―近過去の確認」平成元年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書『美術史におけるデザイン史』、1991/3、pp. 131-147.

22.「クロードグラスの映像」『映像学』第44号、1991、pp. 77-88.

23.「フェリスの摩天楼都市」『デザイン理論』第30号、1991/11、pp. 45-71.

1992

24.「磔刑図の天体―フランドル絵画を中心に」京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第40号、1992/3、pp. 43-64.

25.「ヴェイク・ベイ・デュールステーデの風車―オランダ風景画の深奥」、木村重信・高階秀爾・樺山紘一監修（高橋達史・高橋裕子責任編集）『NHK日曜美術館「名画への旅」第14巻・17世紀Ⅳ・市民たちの画廊』講談社、1992/11、pp. 60-79.

1993

26.『美術とデザインの歴史』NHKきんきメディアプラン、1993/10、pp. 1-140.

1994

27.「シバの女王の乗船―陽光に輝く永遠の瞬間の風景画」、木村重信・高階秀爾・樺山紘一監修（高橋達史･高橋裕子責任編集）『NHK日曜美術館「名画への旅」第12巻･17世紀Ⅱ・絵の中の時間』講談社、1994/1、pp. 96-115.

28.『ナショナル・トラストの国：イギリスの自然と文化』淡交社、1994/11、pp. 1-140.

1995

29.「モールバラのウィリアム・モリス」『デザイン理論』第34号、1995/11、pp. 115-126.

1996

30.「ウィリアム・モリスと反修復運動」『美学』第184号、1996/3、pp. 1-12.

31.「マクマードウの『レンのシティ・チャーチ』をめぐって」京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第44号、1996/3、pp. 129-139.

32.「歴史のなかの現在」島田厚編『現代デザインを学ぶ人のために』世界思想社、1996/6、pp. 174-191.

33.『ウィリアム・モリス：近代デザインの原点』鹿島出版会、1996/10、pp. 1-220.

34.『ウィリアム・モリスへの旅』淡交社、1996/10、pp. 1-122.

1997

35.「バーン＝ジョーンズが人を、ウェッブが鳥を、そしてモリスが野の花を描いた」サントリー文化財団研究助成『ヴィクトリア朝時代の芸術文化の研究―アート・マネージメントの萌芽―』（研究代表者：多田稔）研究成果報告書、1997/4、pp. 15-23.

1999

36.『現代デザイン論』昭和堂、1999/6、pp. 1-240.

37.「ヴィトラ・デザイン・ミュージアム」『美術フォーラム21』創刊号、1999/11、pp. 148-

155.

38.「明治五年刊『西洋家作雛形』の建築用語」『待兼山論叢』第33号美学篇、1999/12、pp. 1–24.

2000

39.「環境デザインの現在」『Nelsis』No. 1、2000/1、pp. 3–22.

40.「ロンドンのデザイン・ミュージアム」『美術フォーラム21』第 2 号、2000/5、pp. 139–146.

41.「オリンピック・ポスターの芸術」齋藤龍一編『オリンピック・ポスターアート展―20世紀の美と感動の軌跡』、大阪、オリンピック・ポスターアート展実行委員会、2000/8、pp. 6–9.

42.「グラスゴー・スタイルの形成：チャールズ・レニー・マッキントッシュとザ・フォー『マッキントッシュとグラスゴー・スタイル』、2000/9、pp. 23–31.

2001

43. "Notomi Kaijiro: An Industrial Art Pioneer and the First Design Educator of Modern Japan," *Design Issues*, Volume 17, Number 2, 2001/3, pp. 17–31.

44.「イギリスとのデザイン交流」「アメリカとのデザイン交流」「ベルギーとのデザイン交流」藤田治彦編『国際デザイン史：日本の意匠と東西交流』思文閣出版、2001/5、pp. 3–7、pp. 49–54、pp. 187–190.

45.「著作権法の礎を築いたホガース」「版画芸術を築いたブレイク」「モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動」樺山紘一他編『印刷博物誌』凸版印刷、2001/6、pp. 708–717.

46.「シモン・ベレスとバンブー・アーキテクチャー」『きゅうぷらす』Vol. 6、2001/10、pp. 4–7.

47.『ターナー：近代絵画に先駆けたイギリス風景画の巨匠の世界』六耀社、2001/12、pp. 1–120.

2002

48.「柳宗悦とアーツ・アンド・クラフツ」『美術フォーラム21』第 6 号、2002/6、pp. 115–119.

2003

49. "Dağin sancısı Shanshui ya da Sansui", *TÜRKIYE'DE SANAT*, 59, 2003/3, pp. 32–37.

50.「ウィリアム・モリスとアーツ＆クラフツ運動の足跡をたどる旅」『世界の建築・街並みガイド・ 2 ・イギリス/アイルランド/北欧 4 国』エクスナレッジ、2003/4、pp. 65–71.

51.「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌―ウィリアム・モリスと柳宗悦をめぐって」『美学』第213号、2003/6、pp. 14–26.

52. “This Will Kill That: Frank Lloyd Wright, Japan, and 21st-century Architecture,” *Selected Papers of the 15th International Congress of Aesthetics*, Tokyo, 2003/07, pp. 71–74.
53. 「本野精吾：インターナショナル建築とモダン・デザイン」「京都高等工芸学校」美術研究会編『京都工芸繊維大学所蔵名品集：1902年の好奇心』三村推古書院株式会社、2003/11、pp. 251–258.
54. 「ウィリアム・モリスのテムズ紀行」『FRONT』No. 183、2003/12、pp. 6–10.

2004

55. ”IMAGES AND LETTERS: History and Philosophy of Hangul Design,” *Visual Humanities*, Osaka University, 2004/2, pp. 52–61.（大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」2002・2003年度報告書 6 『映像人文学』）
56. 「アーツ・アンド・クラフツ運動とは何か」「アート・ワーカーズ・ギルドとアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会」「ウィリアム・モリスと古建築物保護運動」藤田治彦監修『ウィリアム・モリスとアーツ＆クラフツ』梧桐書院、2004/7、pp. 4–5、101–104、124–127.
57. 「アーツ・アンド・クラフツ運動と日本」「ウィリアム・モリスと明治の日本」「セツルメント運動と日本」「東京美術学校と日本美術院」藤田治彦編『アーツ・アンド・クラフツと日本』思文閣出版、2004/9、pp. 1–16、195–202、225–234.
58. 「ウィリアム・モリスのイギリス・１・ウォルサムストウとエピングの森」、『英語教育』、大修館書店、Vol. 53、No. 7、2004/10、pp. 1–4.
59. 「ウィリアム・モリスのイギリス・２・モールバラ校とエイヴベリ」、『英語教育』、大修館書店、Vol. 53、No. 9、2004/11、pp. 1–4.
60. 「イームズを他から分けるもの・イームズをつなぐもの」『The Work of Charles and Ray Eames』Vitra Design Museum、読売新聞社、2004/11、pp. 20–25.
61. 「英国の田園とアーツ・アンド・クラフツ運動」『プラチナサライ』第16巻・通巻378号、2004/12、pp. 26–29.
62. 「ウィリアム・モリスのイギリス・３・オックスフォード」『英語教育』大修館書店、Vol. 53, No. 10、2004/12、pp. 1–4.

2005

63. 「ウィリアム・モリスのイギリス・４・レッド・ハウスからクイーン・スクエアへ」『英語教育』大修館書店、Vol. 53、No. 11、2005/1、pp. 1–4.
64. 「ウィリアム・モリスのイギリス・５・ケルムスコットとコッツウォルズ地方」『英語教

育』大修館書店、Vol. 53、No. 12、2005/2、pp. 1–4.
65.「ウィリアム・モリスのイギリス・6・テムズ川の流れに」『英語教育』大修館書店、Vol. 53、No. 13、2005/3、pp. 1–4.
66.「ウィリアム・モリスとその時代―装飾芸術と環境保護―」ウィリアム・モリス出版委員会『ウィリアム・モリス―ステンドグラス・テキスタイル・壁紙 デザイン』梧桐書院、2005/7、pp. 4–11.

2006

67.『天体の図像学：西洋美術に描かれた宇宙』八坂書房、2006/1、pp. 1–292.
68.「意匠讃嘆・1・杜甫と意匠・曹覇、龍馬を描く」『なごみ』淡交社、2006/1、pp. 70–73.
69.「意匠讃嘆・2・漢文から和文へ・文字と言葉のロマン」『なごみ』淡交社、2006/2、pp. 70–73.
70.「意匠讃嘆・3・芙蓉と木米」『なごみ』淡交社、2006/3、pp. 70–73.
71.「意匠讃嘆・4・国東の小宇宙・条理ひとたび立てば」『なごみ』淡交社、2006/4、pp. 70–73.
72.「意匠讃嘆・5・高橋由一と福地桜痴・明治のふたつの意匠会」『なごみ』淡交社、2006/5、pp. 70–73.
73.「意匠讃嘆・6・雲井織・意匠登録第一号」『なごみ』淡交社、2006/6、pp. 70–73.
74.「意匠讃嘆・7・不忍池をめぐって・龍池会の美術とアート」『なごみ』淡交社、2006/7、pp. 70–73.
75.「意匠讃嘆・8・流行の門を敲く・三井呉服店の新意匠」『なごみ』淡交社、2006/8、pp. 70–73.
76.「意匠讃嘆・9・古い家と新しい文学・島崎藤村の『家』」『なごみ』淡交社、2006/9、pp. 70–73.
77.「何がデザインとなるか」『artificial heart　川崎和男展』図録、金沢21世紀美術館、2006/9、pp. 22–31.
78. "The Arts and Crafts Movement and East Asia: Farmers' Art and Folk Crafts", *International Conferences Art & Welfare, Gongju*, 2006/10, pp. 7–8.
79.「意匠讃嘆・10・さまざまな意匠・モダニズムの機械と装飾」『なごみ』淡交社、2006/10、pp. 70–73.
80.「意匠讃嘆・11・清らかな意匠・谷口吉郎とル・コルビュジエ」『なごみ』淡交社、2006/11、pp. 70–73.
81.「意匠讃嘆・12・千年の意匠・光悦と宗達」『なごみ』淡交社、2006/12、pp. 70–73.

82.「時と場：芸術とデザインにとっての歴史と環境」、第12回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」、2006/12、pp. 21–30.

2007

83.「意匠論序説」『美学研究』、第 5 号、2007/3、pp. 1–17.

2008

84. “East Asian ideas of design: Ishō from Dufu to Miura Baien,” *WORDS FOR DESIGN: Comparative Etymology of Design and its Equivalents*, Osaka University, 2008/3, pp. 4–15.

85. ”Art, Craft, and Architecture for the People,” *International Conferences Art & Welfare*, Leiden, 2008/7, pp. 15–23.

86. “GENESIS OF KANA and its relationship with Japanese art and nature,” *Congress Book I, Panels, Plenary, Artists Presentations*, SANART Association for Aesthetics and Visual Culture, Ankara, 2008/8, pp. 343–348.

87.「近代工芸とモダンデザイン」「ラファエル前派からアーツ・アンド・クラフツ運動へ」「アーツ・アンド・クラフツ、フランク・ロイド・ライト、日本の近代工芸」「柳宗悦と山本鼎」藤田治彦編『近代工芸運動とデザイン史』思文閣出版、2008/9、pp. 1–20、215–229、243–250.

88. “Letters on Images: Concerning Japanese Art,” *International Yearbook of Aesthetics*, Volume 12, International Association for Aesthetics, 2008/12, pp. 68–90.

2009

89.『ウィリアム・モリスとアーツ＆クラフツ』東京美術、2009/1、pp. 1–80.

90.「芸術と福祉・国際会議 2005–2008」『ART AND COMMUNICATION』「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書、2009/3、pp. 10–16.

91.「芸術家としての人間 ホモ・アルティフェクス」「ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動」「フランク・ロイド・ライトと機械時代のアートとクラフト」「タゴールの学園と芸術」「農民美術と民藝運動」藤田治彦編『芸術と福祉：アーティストとしての人間』大阪大学出版会、2009/6、pp. 3–17、38–62、90–111、128–142.

92. ”Yanagi Muneyoshi and Yamamoto Kanae: Their Arts and Identities,” *The Journal of Asian Arts & Aesthetics*, Volume 2, 2009/6, pp. 63–68.

93.「芸術（アート）は何の役に立つのか？」吉岡洋・岡田暁生編『文学・芸術は何のためにあるのか？』（未来を拓く人文・社会科学・17）東信堂、2009/3、pp. 179–188.

94. ”Discovery of ‘Minka’ in the Age of the People,” *The Journal of Asian Arts &*

Aesthetics, Volume 3, 2009/12, pp. 37–43.

2010

95.「民芸運動と建築」藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷聡共著『民芸運動と建築』淡交社、2010/12、pp. 5–24.

2012

96. "NATURE AND JAPANESE ART: Focusing on James Jackson Jarves", *Art and Aesthetics in the Age of Globalization*, 2012/3, pp. 6–13.

97. "NATURE AND ARCHITECTURE: In the City of God and the Land of the Gods", *Yearbook of the International Association for Aesthetics*, Proceeding of the Bologna Conference, 2012, pp. 37–47.

2013

98.「伝統色」の誕生―グローバル化する世界と「日本の色」―『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究―日英間に広がる21世紀の地平―』日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」研究報告論文集、2013/3、pp. 4–9.

99.「ウィリアム・モリスとJ・A・M・ホイッスラー」『アーツ・アンド・クラフツと民藝―ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心とした比較研究』（科研基盤研究（A）調査研究中間報告書）2013/3、pp. 1–6.

100.「モダンデザインの父、ウィリアム・モリスという人」『e-Mook William Morris』宝島社、2013/8、pp. 4–7.

2014

101. "ACADEMIES AND SCHOOLS: Evolution of Ideas and Names in Art and Design Institutions in Europe from the Sixteenth to the Twenty-First Century", *Design Frontiers, Territories, Concepts, Technologies*, Mexico City, Editorial Designo, 2014/5, pp. 41–52.

102.「ウィリアム・モリスの壁紙―近代デザインの先駆者にとっての花と愛―」『花 ファッション』講談社エディトリアル、2014/10、pp. 106–111.

103. "Hokusai and Viollet-le-Duc: Eurasian Roots of Design Aesthetics," *The Journal of Asian Arts & Aesthetics*, Volume 5, 2014/12, pp. 63–68.

2015

104.「現代に生きるモリスと柳―アーツ・アンド・クラフツ運動と民藝運動」『アーツ・アンド・クラフツと民藝―ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心とした比較研究』（科研基盤研究（A）調査研究最終報告書）2015/3、pp. 1–10.

105.「ふたりのウィリアム・モリス―ロンドンとオックスフォード―」『広島日英協会々報』No. 105、2015/4、pp. 5-8.

106.「ウィリアム・モリスのテキスタイル―美しいものをつくろうとする人は、美しい場所に住まなければならない―」『花 ファッション』講談社エディトリアル、2015/4、pp. 98-103.

107.「ウィリアム・モリスと書物の芸術の燦」『武庫川女子大学生活美学研究所紀要』第25号、2015/11、pp. 123-132.

2016

108. "Birth of an Asian Design: Origins of the Chinese word 'sheji' and its relationship with the Japanese word 'sekkei', "*Proceedings of the 10th International Conference of Design History and Design Studies*, pp. 8-14.

109.「レッド・ハウスからクイーン・スクエアへ」「ケルムスコット・マナー」「ケルムスコット・ハウス」「アーツ・アンド・クラフツ運動とモリスの仲間たち」藤田治彦監修『ウィリアム・モリス：原風景でたどるデザインの軌跡』求龍堂、2016/12、pp. 32-33、52-53、72-73、145-146.

110. "EDUCATION DESIGN – A Comparative Approach, "*Estetica, studi e ricerche*, Vol. VI, n.2, 2016/12, pp. 397-408.

2017

111.「マルセル・ブロイヤー 構造と構成」東京国立近代美術館編『マルセル・ブロイヤーの家具―Improvement for good―』東京国立近代美術館、2017/3、pp. 10-20.

三宅祥雄教授　略歴・研究業績一覧

■略歴

学歴

1970年３月　島根県立松江北高等学校卒業
1970年４月　岡山大学法文学部哲学科哲学哲学史専攻入学
1974年３月　岡山大学法文学部哲学科哲学哲学史専攻卒業
1974年４月　岡山大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻修士課程入学
1975年３月　岡山大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻修士課程中途退学
1975年４月　大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程入学
1977年３月　大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程修了
1977年４月　大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程進学
1982年３月　大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程単位修得退学

職歴

1981年４月　大阪外国語大学外国語学部フランス語学科非常勤講師（1982年９月まで）
1982年10月　大阪外国語大学外国語学部フランス語学科講師（1988年12月まで）
1989年１月　大阪外国語大学外国語学部フランス語学科助教授（2007年３月まで）
1990年４月　岡山大学文学部非常勤講師（1991年３月まで）
1991年４月　大阪大学言語文化部非常勤講師（1994年３月まで）
1993年４月　大学改組により大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパⅢ講座助教授（2007年３月まで）
1993年４月　金蘭短期大学文学部英文学科非常勤科講師（1999年３月まで）
1994年４月　神戸大学国際文化学部非常勤講師（1996年３月まで）
1998年４月　岡山大学文学部非常勤講師（1999年３月まで）
2007年４月　大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパⅢ講座准教授
2007年10月　大学統合により大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論講座准教授（同研究科文化表現論専攻美学・文芸学講座准教授を兼任、2017年３月まで）
2017年３月　大阪大学を定年退職

学会役員

2011年 4 月　日本映像学会関西支部幹事（2017年 3 月まで）

■主要業績

著書

1. （共著）『現代思想のトポロジー』法律文化社、京都、1991年 2 月
2. （共著）『哲学入門：哲学基本事典』富士書店、東京、1992年 4 月

論文

1. 「〈心的なもの（プシュケ）〉の疎外構造―初期サルトルにおける心理学批判の射程」『カルテシアーナ』第 2 号、27-63頁、大阪大学文学部哲学哲学史第一講座、1979年 3 月
2. 「〈反省＝自己再帰性〉の基礎論理―サルトル『弁証法的理性批判』への思想史的序論」『カルテシアーナ』第 3 号、33-58頁、大阪大学文学部哲学哲学史第一講座、1981年 3 月
3. 「サルトルの〈実践〉概念」『流域』第 7 号、54-64頁、青山社、京都、1982年 2 月
4. 「サルトル、あるいは〈意識の複数性〉というスキャンダル（一）」*études françaises*、no. 20、pp. 33-58、大阪外国語大学フランス語研究室、1985年 3 月
5. 「サルトル、あるいは〈意識の複数性〉というスキャンダル（二）」*études françaises*、no. 22、pp. 63-84、大阪外国語大学フランス語研究室、1987年 3 月
6. 「サルトル、あるいは〈意識の複数性〉というスキャンダル（三）」*études françaises*、no. 23、pp. 87-116、大阪外国語大学フランス語研究室、1988年 3 月
7. 「『意味の論理学』注解（一）」*études françaises*、no. 30、pp. 135-173、大阪外国語大学フランス語研究室、1997年 3 月
8. 「『意味の論理学』注解（二-ａ）」*études françaises*、no. 31、pp. 133-178、大阪外国語大学フランス語研究室、1998年 3 月
9. 「表層の映像―ロラン・バルトは暗い部屋をいかに改装したか」*EX ORIENTE*、vol. 12、pp. 111-151、大阪外国語大学言語社会学会、2005年 7 月
10. 「映画の視点とその変容（一）」『美学研究』第 7 号、1-17頁、大阪大学大学院文学研究科美学研究室、2009年 8 月
11. 「映画の視点とその変容（二）」『美学研究』第 8 号、1-24頁、大阪大学大学院文学研究科美学研究室、2013年 8 月

エッセイ・雑文

1. 「ハッピーエンドにあらがって」*Arts and Media*、vol. 1、pp. 184–185、大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室、2011年 3 月
2. 「映画のなかの鏡／鏡のなかの映画」*Arts and Media*、vol. 2、pp. 182–187、大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室、2012年 3 月
3. 「フランス風〈ダーティハリー〉あるいはアクションするカメラ」*Arts and Media*、vol. 3、pp. 222–227、大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室、2013年 3 月
4. 「巻頭言：イマージュと想像力のために」*Arts and Media*、vol. 4、pp. 8–9、大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室、2014年 3 月
5. 「引用の戦略―『菊次郎の夏』とカンヌ映画祭」*Arts and Media*、vol. 5、pp. 222–227、大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室、2015年 3 月
6. 「螺旋と反復の物語―ヒッチコック『めまい』の余白に」*Arts and Media*、vol. 6、pp. 277–282、大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室、2016年 3 月

翻訳

1. （共訳）ロベルト・ザッペーリ著『妊娠した男―男・女・権力―』青山社、京都、1995年 5 月
2. （共訳）ディディエ・ジュリア著『ラルース哲学事典』弘文堂、東京、1998年 9 月